

中国海洋大学構内空間構成の形成過程とその特徴

The Formation and features of the Campus Spatial Compositions in Ocean University of China

江 本 硯* 藤川 昌樹**

Benyan JIANG Masaki FUJIKAWA

Abstract: The campus of Ocean University of China is composed by Daxue road part and Yushan road part. These two parts shows quite different features no matter in the spatial composition or the garden. The campus located next to Daxue road used to be a barracks constructed by the German governors in 1902, while the other part located next to Yushan road used to be a middle school constructed by the Japanese governors in 1919. There was no main building or main axis, in the Daxue road part because of the existing barracks buildings. Sport space was arranged in front of the third schoolhouse near the entrance, which is quite different from the middle school and the general spatial pattern. While the middle school not only had a main building but also a visual axis. As for the gardens, the Daxuelu campus garden was surrounded by western style buildings and totally designed into geometrical style, even platanuses planted on this campus were imported from Germany. By contrary, the garden on the Yushan road campus was firstly built in western style and then changed into Japanese style. Black pine was planted in the center of the garden, symbolizing Japanese garden culture. The reason was possibly because park was considered as a symbol of advanced western civilization in China, while it seems that the Japanese governors intended to emphasize their own culture in its colony.

Keywords: barracks, university, formal garden, Japanese garden

キーワード：兵営、大学、整形形式庭園、日本式庭園

1. はじめに

1928年に中華民国が統一されてから、1937年に日中戦争が勃発するまでの10年間は政治は比較的安定しており、教育、衛生、司法、商工業などのそれぞれの分野において非常に大きな発展を遂げ、中華民国時期の「ゴールド10年」と呼ばれている。教育は立国の基礎とされ、特に高等教育は専門人材の養成に不可欠であり、1928年以降に中華民国政府が教育権の回復¹⁾、大学の建設、制度・法律の整備に力を注いだ。1929年の教育部の調査によれば、国立・県立・私立大学は46校であり、このうち新設された国立大学は4校であった²⁾。国立青島大学、すなわち現中国海洋大学の前身はその中に入っていた。

現在、「十大美しいキャンパス」に入っている中国海洋大学は山東省青島市に位置し、北側と東側でそれぞれ青島山と小魚山と隣接しており、南に匯泉湾の第一海水浴場があり、風景が優れた場所に立地している。本部は大学路キャンパスと魚山路キャンパスの二つの部分からなっている。魚山路キャンパスは清朝に作られた兵舎から作られ、大学路キャンパスはドイツ統治期(1898-1914)の兵舎から造られた。本稿はまず兵舎が学校として選定された理由は何なのか、軍事施設から教育施設に転換する時に空間構成においていかなる変化が起きたのか、中国海洋大学のキャンパスにはどういう独特な空間構成があったのかを明らかにすることを目的とする。また、日本統治期(1914-1922)に造られた魚山路の青島日本中学校については空間構成の形成過程を分析し、大学路キャンパスの空間構成といかなる共通点と相違点があったのを明らかにする。

中華民国時期に数多くの大学が設立されたが、大学キャンパスの空間構成に関する研究はほとんどない。わずかに張清海³⁾が南京の3つの大学を対象とし、キャンパスの空間構成の特徴を分析している。中国海洋大学の校史に関する研究⁴⁾はみられるが、キャンパスの空間構成に関する研究は行われていない。

本研究の研究手法としてはまず、ドイツ、日本、中華民国統治期に出版された『膠州湾発展備忘録』(以下『備忘録』と略す)⁵⁾、『土木誌』⁶⁾、『膠澳志』⁷⁾を利用し、各統治期の青島市の政治、社会、建設の状況を全体的に把握する。キャンパスの構成と変化については主に各時期の学校の校誌に載せられている平面図を参考にし、校舎及び各種類の施設の増減や道の変化をとらえる。庭園に関しては、平面図に加え、各時期に撮影された写真を用い、各統治期の施設の様式、庭園の道路の構成と植栽に如何なる変化が起きたかの確認をする。さらに、現地調査を行い、建物、庭園と植栽の現状を把握していく。

2. 大学路キャンパスの建設経緯と空間構成の形成過程

(1) ビスマルク兵舎の建設

1898年に「膠澳租借条約」が締結されたのに伴い、青島はドイツの租借地となった。膠澳地区海軍局は青島を何よりまず艦隊基地として位置付けた。軍事上の重要な役割を妨害しないという前提で、青島を商業植民地として建設する政策が講じられたという⁸⁾。このような軍事上の戦略により、1898年-1914年の17年間には青島に駐在していた軍隊は常に青島の欧州人口の半分以上を占めていた。1899年には守備軍の人数は最も少なかったが、1,499人がいた。1907年には3,528人であり、ピークとなった。それに対し、1907年に青島に住んでいたドイツ人は1,412人であり⁹⁾、軍の1/2弱であった。このように多くの兵士が青島に駐在していたため、ドイツ総督府にとって兵舎を造るのは青島を占領した段階で一番重要な仕事の一つとなった。

1902年にビスマルク山(現青島山、図-2)で2ヶ所目にあたる¹⁰⁾ビスマルク兵舎の構築が始まった。その立地に関しては「場所が絶好であり、絵のような美しい風景を持ち、海と珠山が眺められる」と記されている¹¹⁾。ここには元々清朝政府によって建てられた「東大營」という兵舎があったが、空間と衛生の問題

*筑波大学芸術系 **筑波大学システム情報系

で新しい兵舎に取って代わることになった。新しい兵舎には専用の洗濯室と水洗トイレが配備された。大規模な水洗トイレが配備されたのは東アジアで初めてであった¹¹⁾。1903年の夏に兵舎は使用に供され¹²⁾、工費は75万マルクがかかった¹³⁾。1906年—1909年の間には、機械補修工場、鍛鉄工場、貯蔵室、接待室と競馬場が相次いで建てられ、兵舎の施設が完備されることになった¹⁴⁾。

1914年に日本が青島を占領すると、ビスマルク兵舎は日本守備軍の兵舎となり、「万年兵營」に改称された。このように、後の大学路キャンパスとなる敷地の建物はドイツ統治期から日本統治期まで兵舎とその関連施設として使われていた。

(2) 学校への機能転換

1922年12月に中華民国北洋政府は日本から青島の支配を回復した。翌年の3月に青島の教育状況の調査が行われ、1924年の「調査青島教育報告書」¹⁵⁾には青島に国立大学を設立すべきだという建言が既にみられる。「中央政府は青島に国立大学を1カ所設立すべきである。それは青島を回復した記念としてだけでなく、(中略)ここで大学を設立し、各地の学生に入学の利便を提供すれば、政治の中心から離れている青島で安心して勉強できる。もしビスマルク兵營を大学にすることができれば、非常にふさわしい。新たに構築すれば、湛山の臨海地帯の平地も広々としており、ふさわしい」。この記述から、まず、国立大学の設立には青島を回復したことの記念という、政治的な理由が込められていたこと、一方で政治中心地から一程度離れた地が学問の場として良いとも考えられていたことも分かる。また、青島内部での大学の立地場所についてはビスマルク兵營と湛山の臨海地帯が候補として想定されていたこともわかる。しかし、残念ながら軍閥の混戦があり、国立大学の実現はできなかった。

だが、当時膠澳商埠の監督であった高恩洪が大学の設立の重要性を感じ、私立青島大学の設立を発起した。当時の膠澳駐軍と交渉した結果、兵舎の施設は校舎として使われることになった。学校を設立する準備経費としては高恩洪が1万円、青島の銀行家である劉子山が2万円を寄付した。1924年8月に私立青島大学が正式に成立し、高恩洪が学長を兼任した。毎月膠澳商埠公署から1万円の割当金、膠濟鉄道局から6000元と上流階級及び商人たちの寄付金4000元を日常経費として大学は経営していた¹⁶⁾。

1925年5月には中国国内の軍閥であった直隸(北京)と奉天派(瀋陽)の間に戦争があり、直隸軍閥の敗戦によって、膠澳の監督から高恩洪が退職した。このような事情により、私立青島大学の経費は影響を受け、1925年—1927年の間には学生を募集していなかったという¹⁷⁾。1928年には学校の経営自体が停止された。

1929年には中華民国南京政府が青島を接收し、青島は特別市として中央政府が直接に管轄していた。同年、国立青島大学委員会が成立し、私立青島大学の施設、財産に加え、済南にあった旧山東大学も接收し、国立青島大学の設立を準備し始めた。国立青

島大学は青島に設置され、工場と農事試験場が済南にも設置され、学校の規模も力もかなり大きくなった¹⁸⁾。1930年4月に国民政府教育部は楊振声を学長に任命し、国立青島大学が正式に成立した。1931年9月18日の「満州事変」のあと、学生の抗議活動があったことを理由にし、楊振声が学長を辞職した。1932年9月国立青島大学は国立山東大学に改名され、趙崎が学長に赴任した¹⁹⁾。1937年に日中戦争が勃発し、1938年には国立山東大学の運営が停止されたが、日本敗戦の翌年の1946年に、国立山東大学はまた青島で回復された。

(3) 空間構成の形成過程

図-1は1907年のビスマルク兵營の配置を示しているものである。未完成の兵舎を含めれば、主要な建物が6棟あり、訓練場の3辺に配置されている。未完成の兵舎にいたる破線が描かれ、そこで道路を構築する予定であったことがわかる。その道路を1915年の市街地図で確認できる²⁰⁾(図-2)。兵舎の周りには塀や柵が建てられておらず、直接道路に接している。建物は明確な軸線を持っているが、敷地全体を支配する軸線はなかった(図-5)。兵士を訓練するスペースを確保するために、空地には庭園が造られず、わずかに訓練場の外側に樹木が植えられていたことが知られる(写真-1)。現在、大学のキャンパスには樹齢100年以上のプラタナスが21本現存することから(写真-2)²¹⁾、当時に植えられた樹木はプラタナスだったと判断される。

図-3は1928年の私立青島大学の平面図である。兵舎の配置図と比較すると、建物の数と配置はほとんど変わっていなかったことが分かる。主要な建物の上に壱百号から六百号、図書館、「大礼堂」(ホール)との建物の名前が書かれ、兵舎が学舎として使われることになった。空間構成において、大きな変化は大学路に校門が設けられたことである(図-3、写真-3)。校門は壱百号校舎の軸線の延長線上に設けられ、道路からセットバックしている。校門が設けられたことから、校舎の周りに塀や柵が立てられたと推測される。壁で囲まれる空間を造るのは中国の住宅の伝統であるため、大学もその影響を受けたと考えられる。図-4は1935年の国立山東大学の平面図である。図-3と比べると、校舎や運動場はかなり充実させられたことが知られる。まず施設の面において大きい変化は1934年の科学館の落成である(写真-4)。科学館は庭園に面し、窪地だった場所の埋め立地に建てられた。建物は3階建て、左右対称であり、高さが周辺の建物と統一されている。こうして、主要な建物が庭園の周りに配置され、洋風建築群が形成された。これは同時期の大学に中国伝統的建物あるいは伝統的な屋根がついている折衷式建物で形成された景観と異なった。建築群の後ろに空地がないため、校門の近く、第三校舎の前に運動場が構築されることになった。第三校舎にいたる道がなくなり、第一校舎と第三校舎の間に新たに道が造られた。私立青島大学(図-6)と国立山東大学(図-7)の構成空間を合わせてみると、校門から第一校舎まで道が敷かれ、その両側に

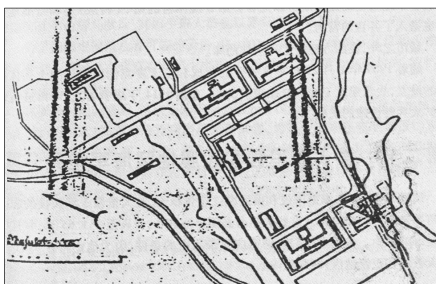


図-1 1907年頃のビスマルク兵舎の平面図
 (『青島城市与军事要塞建设研究(1897—1914)』より)



写真-1 日本統治期の万年兵營
 (<http://homepage3.nifty.com/akagaki/13-1tsingtauphoto.html>)



写真-2 現存のプラタナス
 (撮影の場所は図-10で示している。)



図-2 1915年の万年兵営
(1915年の「青島市街図」²²より)

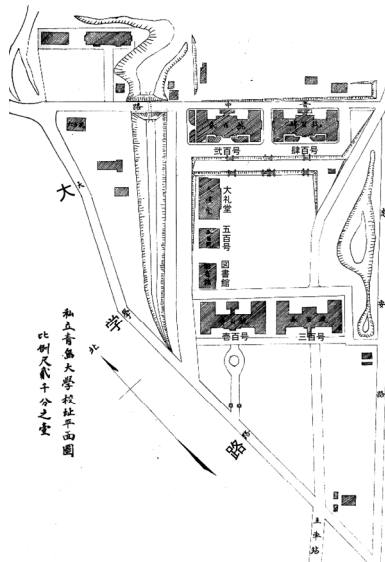


図-3 1928年の私立青島大学平面図
(『私立青島大学一覽』より)

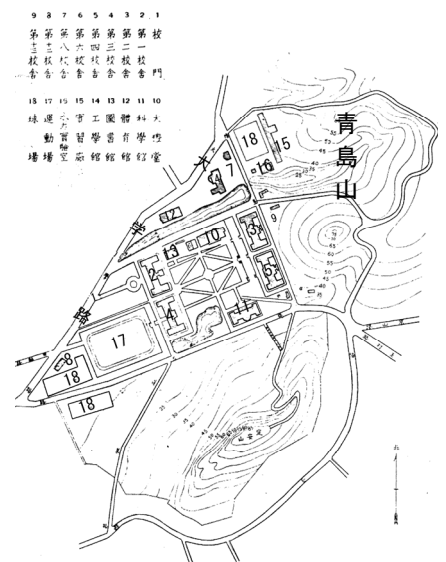


図-4 1935年頃の国立山東大学平面図
(『国立山東大学一覽』より)

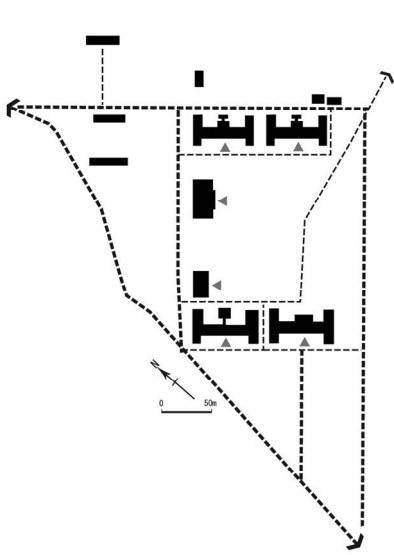


図-5 ビスマルク兵舎の空間構成
(図-1、図-2と図-3より作成)

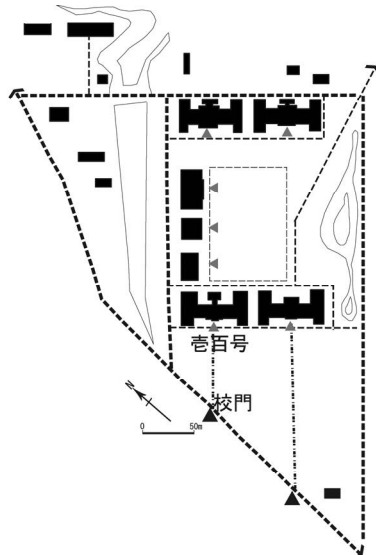


図-6 私立青島大学の空間構成
(図-3より作成)

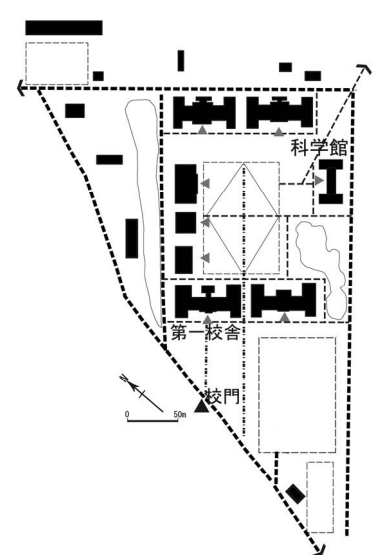


図-7 国立山東大学の空間構成
(図-4より作成)

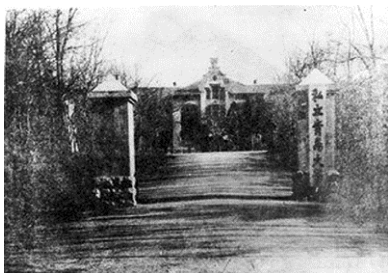


写真-3 1928年頃の私立青島大学の校門
(『私立青島大学一覽』より)



写真-4 1935年頃の科学館
(『国立山東大学一覽』より)



写真-5 庭園の中心における築山
(筆者撮影、撮影の場所は図-11で示している。)

並木が植えられ、空間軸線とエントランス空間が形成されていることがわかる。ただし、私立青島大学でも国立山東大学にも中心建物がなく、軸線は左側（西側）にずれ、運動場が校門の近くに配置されていることから既存の兵舎と地形の制約を受けたと推測される。

また、私立青島大学と比べると、国立山東大学に最も大きく変化していたのはかつて訓練場であった庭園の部分だった。大学に転換され、兵士を訓練する必要がなくなり、観賞性の高い庭園が作り出された。具体的な時期は不詳であるが、1928年の私立青島大学の平面図（図-3）に描かれていないので、この庭園はおそらく国立山東大学に転換された際、新たに落成した科学館とその前の道とともに整備されたと推測される。図-4によれば、園路は四角形の中心軸線と対角線に沿って造られ、園路が交わる場所に円形広場や半円形広場が設けられていることがわかる。このように庭園は平面幾何学的特徴が明らかであり、中国の伝統的な設計の特徴とは全く違うものである。それはもともと学校が兵舎の施設を利用し、敷地は3面でドイツ風建築に囲まれ、庭園は建物の様式にあわせて作られたものであったからと考えられる。もちろん、この庭園以外にも青島市やほかの都市で西洋風の公園が多く造られたことは事実である。実際、1935年の「青島市施行都市計画方案初稿」はロンドン、ニューヨーク、ベルリン、パリの都市計画を参考にしながら編成されたものである。公園緑地の建設についても当時の計画者たちは欧米の都市計画学者が指摘したように都市面積の半分以上を公園緑地として建設すべきだという観点は正しいという認識を持っていたことがわかる²³⁾。そこから、当時欧米の都市計画は青島の都市及び公園緑地の建設に与えた影響が見られる。ただし、現地調査によると、円形広場の中には西洋式の噴水ではなく、中国式の築山が設けられ、視線の焦点になっている（写真-5）。築山が構築された時期は不詳であるが、この洋風の庭園で唯一の中国の伝統的な造園要素であり、中国の庭園の伝統も一部では踏襲されていたと解釈することも可能である。

3. 魚山路キャンパスの建設経緯と空間構成の形成過程 (1) キャンパスの建設経緯

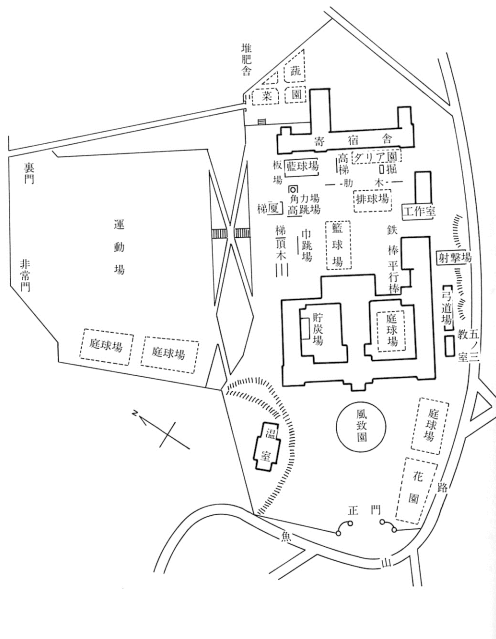


図-8 1935年青島日本中学校の配置図
『青島日本中学校校史』より

1914年に日本が青島を占領するとともに青島に住んでいた日本人が1913年の316人から1915年の11,009人まで急激に増加した²⁴⁾。このような背景により青島に住んでいる日本人の教育のために、多くの小、中学校が造られた。

青島中学校は1917年2月8日青島守備軍（その当時の軍司令官は大谷喜久蔵大将）軍令第3号をもって青島中学校規則を公布した²⁵⁾。同年2月21日青島軍政告示第11号により「青島ニ青島中学校を設置シ旭町旭兵営ヲ以テ校舎に充テ大正六年四月四日ヨリ開校ス」と告示され、旭兵営（旧イルチス兵舎）校舎として青島中学校は開校した²⁶⁾。ただし、校舎は、外観も堂々としており、建築も極めて堅牢であったが、あくまでも兵舎であり、学校施設として中学校令施行規則による設備の規定に適合しない点も種々あり、一方で、生徒数の増加にともなってその収容は困難となることが予想され、大正八年（1919年）頃から校舎新築の計画が検討されたという²⁷⁾。

1919年、校舎新築の敷地として、元来中国の兵舎であり、ドイツ統治期には気球格納庫が置かれ、その後、日本統治期に石油倉庫と通信部寄宿舎として使われた場所（後に魚山路に改称）が選定された（図-2）。最初に運動場の工事が着手され、1920年3月5日に校舎建設の地鎮祭が挙行された。1921年6月27日に新校舎（桜ヶ丘校舎）は落成し、8月25日に寄宿舎も落成し移転した²⁷⁾。桜ヶ丘新校舎は、総工費約60万円かかったという。

1922年に中華民国北洋政府が青島を回復したが、日本人居留民は引き続き青島に滞在し、学校と寺院、神社、病院などの施設は日本人の日常生活に必要な施設として日本人居留民団体に保留された²⁸⁾。1923年3月に日本と中国青島行政の引き継ぎは完了した。それ以後、在外指定校としての青島日本中学校の経費は、外務省の特別会計から支出されることになった²⁹⁾。1937年日中戦争によって、学校は一時的に閉鎖されることになり、1938年

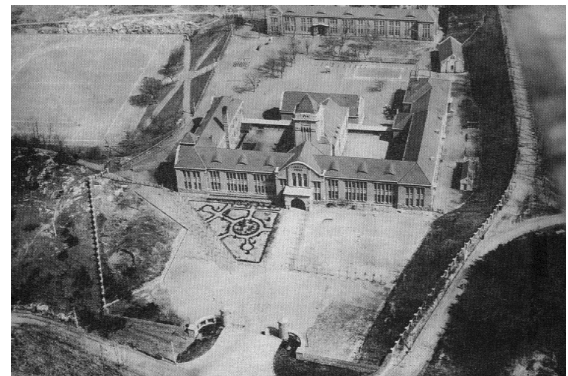


写真-6 1920年代の中学校（『青島日本中学校校史』より）

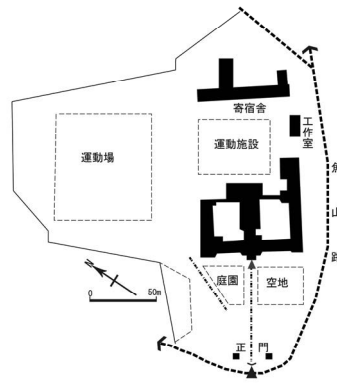


図-9 1920年代の中学校の空間構成
(写真-6より作成)

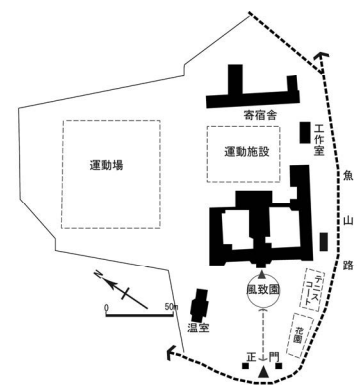


図-10 1935年青島日本中学校の空間構成
(図-8より作成)

3月には学校の経営が戦争によって停止されたという³⁰。

(2) 空間構成の形成過程

中学校の敷地面積 14,890 余坪 (約 49,223m²)、総建坪は 1,200 坪 (約 3,967m²)、室内にはスチーム暖房、水流式の下水道が完備された²²。校舎は煉瓦造 2 階建て、腰回り花崗岩積、その上部総体「セメント」漆喰塗りであり³⁰、塔を中心とし、左右対称の特徴が現れている (写真-6)。外観はドイツ風で設計されたのは、日本統治期に「建築ノ外観ハ之ヲ建設スベキ当該市区ノ体裁ニ適応セシムベシ」²² という景観上の配慮があったからと考えられる。建物が非常に立派であり、「日本内地にも稀ニ見ルカ如キ宏荘ナルモノ」、「門柱一基が内地の農村の小学校の施設に匹敵すると言われていたほどであった」³⁰。それは景観上の配慮だけではなく、日本国の国威を意識させられる場合もあったようである。この点については、1939 年から敗戦で引き揚げるまで国語と漢文を担任した石井守教諭が学校の象徴的意味について次のように書いている。

青島日本中学校は、異国にある日本の外地における国威発揚の文化的砦であった。(中略)。あの天を突く尖塔を中心に、煉瓦造りの校舎左右対称、鳳のように両翼を大きく豊かに張った豪華な威容の象徴であった³⁰。

写真-6 の鳥瞰図と図-8 の配置図から青島日本中学校の空間構成がわかる。校舎の周辺に柵で囲まれ、学校の正門は魚山路に設けられている。隣の大学と同様に、校門は道路からセットバックし、バッファゾーンが形成されている。正門から向かった位置に校舎が設けられ、校舎の後ろに寄宿舎や運動場など付属施設が設けられている。

正門と校舎の間には風致園が設けられている。ただし、鳥瞰

写真と配置図が示しているものはかなり異なっている。配置図の西側に温室が描かれているが、鳥瞰写真ではそこはまだ更地のままであり、校舎の後ろにある運動施設もすくないことから、鳥瞰写真は学校の主要な施設が竣工して早いうちに撮られた写真だと判断される。すなわち、庭園は写真-6 の形式から一回造り替えられたことがわかる。鳥瞰写真に写っているキャンパスには、学校の正門と校舎は直線状の道で結ばれ、風致園は道によって東西の両部分に分けられていたことが分かる。東の部分は更地であり、西側は円形を基本要素とし、顕著な西洋風の庭園が創出されている。しかし、1935 年の配置図には風致園は一つの円形となり、建物の玄関の正面に設置されるようになった。写真-7 と写真-8 をあわせてみれば、風致園の位置は一致していることがわかる。庭園が玄関の両側から正面に移動し、地形が少し高く整備されることによって、正門から校舎玄関に至る視線軸は遮断されることになった (図-9、図-10)。

また、全体的に見れば、学校の正門は道路に接し、エントランス空間が広く、主要な校舎が中央に立っており、その前に庭園が設けられている空間構成となっている。庭園植栽においては、大学路キャンパスに植えられたプラタナスに対し、風致園にはクロマツが中心に植えられている。それは現在でもほとんど変わらなかった (写真-8)。そして、現地調査によると、校舎の西側にも一列のクロマツが植えられており (写真-9)、それは日本統治期に植えられたものだと推測される。クロマツの採用は日本が自国の伝統的庭園の文化を青島に移入しようとしたことが見られる。そして、西洋風の庭園からクロマツが多く植えられる風致園に転換されたことには、自国の文化を強調する意図も込められていただろう。

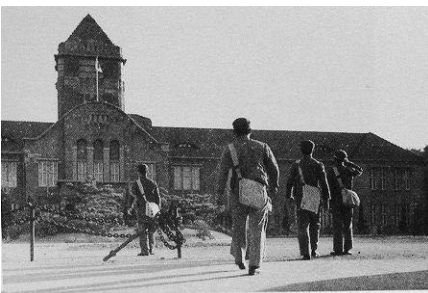


写真-7 1940年の風致園
(『青島日本中学校』より)



写真-8 正門からの風致園現状
(筆者撮影)



写真-9 一列のクロマツ
(筆者撮影、撮影の場所は図-11 で示している。)

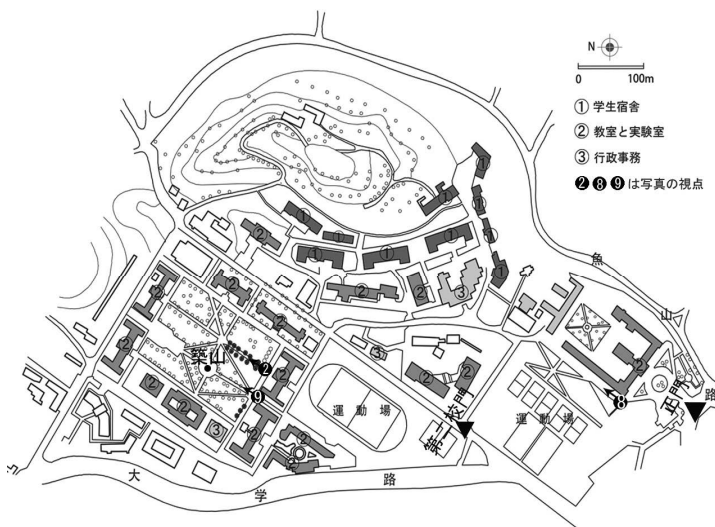


図-11 中国海洋大学平面図 (研招網に載せられている平面図より作成
<http://yz.kaoyan.com/ouc/zixun/03/367447/>)

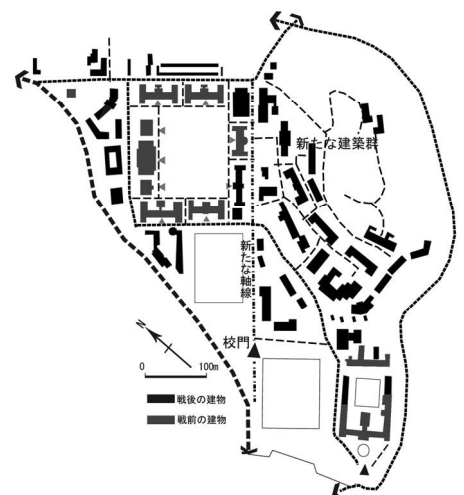


図-12 中国海洋大学空間構成図 (図-11 より作成)

4. キャンパスの合併と空間構成の現状

1949年6月2日には青島が解放され、国立山東大学が日本中学校を合併し、青島で復校した。1958年10月に国立山東大学の主体は済南に移転し、青島に残ったのは海洋系、水産系と生物系の海洋生物専門と物理、化学などの学科であった。1959年3月に残された学科で山東海洋学院が創立され、中国教育部に属する独立の総合大学になった³⁴⁾。1988年に山東海洋学院は「青島海洋大学」に改名され、2002年10月10日には「中国海洋大学」に改称する申請が中国教育部に認められ、現在では国レベルの総合大学になった³⁵⁾。1980年代以降、学生数が次第に増えたことに伴い、1990年代に青島市の浮山と2006年には労山にもキャンパスが造られた。

図-11は現在の中国海洋大学本部キャンパスの平面図である。合併後のキャンパスはほぼ中央を通るに道によって二分されている。国立山東大学キャンパスの庭園南東部の窪地が埋め立てられ、校舎が2棟、北東部に1棟増築されたが、庭園の空間はほとんど変わらなかった(図-11)。一方、運動場の西側にも2棟の建物が建てられ、南西部にあった道と校門が全部なくなった。その代わりに、国立山東大学の校舎と青島日本中学校の間に校門が設けられ、両者の間にある道は合併後のキャンパスの主軸となっている(図-12)。

青島日本中学校の後ろには学生宿舎や行政用の建物が非常に増えている。これは1980年代から学生数が大幅に増加した結果だと考えられる³⁶⁾。また、日本中学校の校舎の北東部に増築が行われ、以前にあった運動施設が撤去され、四角形の緑地が設けられている。玄関の前にあるクロマツを中心とする植物景観と異なり、ここにはヒマラヤスギが多く用いられている。ヒマラヤスギは1980年代に青島の市樹になってから公園や街路に多く使われることになった。これもおそらくヒマラヤスギで青島市の文化を強調するという意図のもと植えられたと推測される。

5. おわりに

日本政府も中華民国政府も教育を重視し、教育機関の建設に力を入れた。最初に兵舎が学校として選ばれた理由には兵舎が「外観も堂々としており、建築も極めて堅牢であった」ということもあるし、兵舎は学校に転換可能な広さと好立地も備えている。そのうえで、優れた風景を利用し、学生が安心して勉強できる環境が作り出された。教育施設としては、国立山東大学と青島日本中学校両者とも柵や塀で囲んで、独自の空間を確保した上で、門やエントランス空間が造られていた。中学校の中央に校舎と風致園、後ろに宿舎や運動場などの付属施設が設けられ、校門と校舎をつなぐ軸線が形成されたが、大学の方は既存の建物と地形に制限され、運動場は前、庭園は後ろにあるという通常とは逆の配置パターンが形成された。そして、校舎や運動空間を作るために大学路キャンパスのエントランス空間は徐々に狭くなっていった。このことにより、日本青島中学校の正門は現在でも中国海洋大学の正門として使われ、さらに大学のシンボルとなったのだと考えられる。

また、庭園の部分にも全く違う特徴が現れている。近代に入り、中国でも日本でも西洋の文明に影響され、建築だけではなく、庭園緑地にも平面幾何式が導入されることが多かった。ただし、国立山東大学には完全な整形式の庭園が作り出されたことに対し、青島日本中学校では西洋式からクロマツを中心とする日本式庭園に戻った。これはおそらく植民地であったからこそ、自国の文化を持ち込むべきだという考えに基づいたのではないかと。

補注及び引用文献：

- 1) 1865年から外国教会が中国大陸で学校を設立し始め、のちに有名な大学になったものは多い。教会以外には義和団事件の賠償金によって設立された清華大学、鉄道局によって設立された学校(たとえば北京交通大学)が徐々に教育部に接収されたという。
- 2) 外務省文化事業部(1931年)：中華民国教育其他ノ施設概要、6-7、35-36。ほかの3カ所は浙江工科大学、労働工科大学と武漢工科大学である。
- 3) 張清海・孔明亮・章俊華・三谷徹(2013)：南京民国時代における大学キャンパスの空間構成及び特徴に関する研究、ランドスケープ研究76(5)、505-510
- 4) 青島日本中学校校史編集委員会(1989)：青島日本中学校校史、青島日本中学校校史刊行会
- 5) 青島市档案館(2007)：膠澳發展備忘録全訳、中国档案館出版社。『膠州灣發展備忘録』はドイツ青島総督府が作成した政府の業務報告である。
- 6) 青島守備軍民政部(1920)：土木誌
- 7) 青島市農林技術所(1932)：青島農林
- 8) 青島市档案館(2007)：膠澳發展備忘録全訳、中国档案館出版社、3
- 9) 青島市档案館(2007)：膠澳發展備忘録全訳、中国档案館出版社、515
- 10) 第1カ所はイルチス兵營であり、イルチス山現大平山に立地し、1899-1901年に構築された。
- 11) 青島市档案館(2007)：膠澳發展備忘録全訳、中国档案館出版社、206
- 12) 同上
- 13) 田久江南(1921)：青島要覽、新極東社発行、271-272
- 14) 约尔克・阿泰尔著、青島市档案館編譯、青島城市与军事要塞建設研究(1897-1914)、青島出版社、54、2011
- 15) 李貽燕(1924)：「調査青島教育報告書」、膠澳商埠教育彙刊付録
- 16) 膠澳商埠督辦公署民政科学務股(1924)：膠澳商埠教育彙刊、青島市档案館所蔵、請求番号A000815。ただし、それは未公開史料であるため、ここで青島市情網から引用している。
http://www.liveqingdao.cn/mp/yf/mingxia/201108/03367_2.html (12月11日は最終閲覧日)
- 17) 李耀燦(2004)：中国海洋大学、浙江工科大学出版社、10
- 18) 国立山東大学(1935)：国立山東大学一覽
- 19) 李耀燦(2004)：中国海洋大学、浙江工科大学出版社、11
- 20) この地図に道路が2つの兵舎の真ん中に描かれているが、のちの青島私立大学の平面図と1928年の市街図と照らし合わせると、この地図に描かれている道路の位置はずれていると判断される。
- 21) 青島市史志辦公室・青島市林業局・青島市園林局：青島古樹名木志、中国海洋工科大学出版社、162
- 22) 上山松蔵(1915)：大正四年八月改正青島市街図
- 23) 青島市工務局(1935)：青島市施行都市計画方案初稿、37。
- 24) 青島守備軍大正四年度第一統計年報、第三人口
- 25) 前掲4)、3
- 26) 前掲4)、33
- 27) 前掲4)、33-34
- 28) 1922年中日「山東懸案解決に関する条約」及び附約が『膠澳志』「沿革志」「中国回復の顛末」に掲げられている。その第七条には日本保留財産が規定されていた。(甲)日本領事館に必要な財産と(乙)日本人居留民団に必要な財産に分けられている。乙は日本人会、化学試験所、青島病院、中学校、高等女学校、第一小学校、青島神社、忠魂碑、青島斎場、火葬場、墓地を含んでいる。
- 29) 前掲4)、8
- 30) 李耀燦(2004)：中国海洋大学、浙江工科大学出版社、12
- 31) 前掲4)、204
- 32) ドイツによって作られた建築規則であったが、日本が青島を占領後ドイツの諸法令をほぼそのまま踏襲した。
- 33) 青島日本中学校校史、21
- 34) 李耀燦(2004)：中国海洋大学、浙江工科大学出版社、13
- 35) 李耀燦(2004)：中国海洋大学大事記、中国海洋工科大学出版社、412
- 36) 1982年に366名の学部生だけが採られたが、1986年には学部生、修士、専門学生などを含め、1379人が採られることになった。現在、中国海洋大学には39,500人の学生がいる。